

# 英語コーパス学会 第 50 回大会資料

日時：2024年10月5日（土）-10月6日（日）  
会場：青山学院大学 青山キャンパス 1号館 3階  
東京都渋谷区渋谷 4-4-25

英語コーパス学会 2024

本大会の開催費の一部は青山学院大学経済学部からの助成を受けています。

# 第 50 回大会 プログラム

■第 1 日目：10 月 5 日（土）  
 受付開始 8:30（137 教室前）

●ワークショップ I：9:00–10:30（135 教室）  
 Automatic annotation of epistemic stance-taking features: An NLP approach Eguchi Masaki（Waseda University）

<休憩 10:30–10:40>

●ワークショップ II：10:40–12:10（135 教室）  
 ドイツ語コーパスの教育利用について 牛山さおり（立教大学）

<休憩 12:10–13:10>

●開会式・総会 13:10–13:50（135 教室）

司会：小島ますみ（事務局長）（名古屋大学）  
 田畑智司（大阪大学）  
 佐竹由帆（青山学院大学）

1. 会長挨拶  
 2. 開催校挨拶  
 3. 総会  
 4. 学会賞審査報告  
 5. 事務局からの連絡

今林修（学会賞選考委員長）（広島大学）

●研究発表：14:00–16:15

	Session 1（131 教室） 司会：田中悠介	Session 2（133 教室） 司会：神原一帆	Session 3（134 教室） 司会：田畑圭介	Session 4（135 教室） 司会：仁科恭徳
14:00–14:30	【1-1】 福田航平 日本人英語学習者による ENABLE 概念の表現形式	【2-1】 竹下綾音 小学校英語検定教科書中の基本動詞の分析とその出現傾向	【3-1】 瀬戸義隆 工学分野論文における能動態と受動態に関する考察	【4-1】 岡田晃 否定接頭辞 un-付加派生語の歴史的考察—Unkempt の事例を中心に—
14:35–15:05	【1-2】 Ryo Sawaguchi Potential of L1 and L2 Corpora to Identify Target Lexical Bundles for Argumentative Essay Writing	【2-2】 川越涼太 英語資格・検定試験の CEFR レベル推定—CVLA を用いたリーディングとリスニングの難易度比較—	【3-2】 石井達也・河本健 基礎医学論文におけるハイフンを含む名詞句のパターン	【4-2】 久屋愛実 Than I/me を伴う比較構文における格のゆれ
15:10–15:40	【1-3】 Kohei Takebayashi Lexical Hierarchies in L2 Vocabulary Development: A CEFR-Based Analysis	【2-3】  キャンセル	【3-3】 伊澤宜仁 NEJM の症例報告における頻出表現	【4-3】 土屋知洋 HAVE the advantage が従える同格節 that—that 節中の助動詞 can は必須要素か—
15:45–16:15	【1-4】 前田裕司 同一学習者の技能間における産出結果の違い—スピーキングとライティングの比較から—	【2-4】 岡田美穂子 日本人英語学習者の過度受動化の誤り—高校教科書からのインプットの影響に関連して—	/	【4-4】 森下裕三 Just because 構文の変異理論的分析

<休憩 16:15–16:30>

●シンポジウム I : 16:30-18:00 (135 教室)

ジェンダーと英語教育

モデレーター： 佐竹由帆 (青山学院大学)

シンポジスト： 石川有香 (名古屋工業大学) 「現代の英語教科書に見るジェンダー」  
江利川春雄 (和歌山大学名誉教授) 「歴史的視点から見る英語教科書のジェンダー」  
佐竹由帆 (青山学院大学) 「英語指導 (DDL) とジェンダー」

●情報交換会 (懇親会) 18:30-20:30 (アイビーホール1階宴会場)

※懇親会は事前予約制です。 <https://forms.gle/P9ZDDJ2qitYjSvzn8> より 9月22日(日)までにお申込みください。

■第2日目：10月6日(日)

受付開始 8:45 (137 教室前)

●研究発表：9:00-10:40

	Session 1 (131 教室) 司会：Laurence Newbery-Payton	Session 2 (133 教室) 司会：竹林浩平	Session 3 (134 教室) 司会：西垣知佳子	Session 4 (135 教室) 司会：森下裕三
9:00- 9:30	【1-5】 立野寛太 Hurford の制約に基づく “A or B”/“B or A”の形式 差：COCA データと R/Stan によるロジステ ィック回帰分析	【2-5】 河瀬農 中学校における発見学 習による学力の二極化 解消の試み—データ駆 動型学習(DDL)を帯活動 に導入して—	【3-5】 田中悠介・瀬戸口彩 花・近大志・神澤克徳 日本人英語学習者の発 話におけるフィラーの 生起位置と習熟度の関 係性	【4-5】 中谷安男 CEFR-J ライティング プ ロジェクト：さいたま 市との協働による学習 者コーパス分析
9:35- 10:05	【1-6】 Li Chenjie A Stylometric Approach to the Sherlock Holmes Series and its Pastiches	【2-6】 Xiao Yuanyuan コーパスに基づく英語 政治ニュース研究—英 語母語圏と非母語圏の 比較研究—	【3-6】 田中美優・投野由紀夫 日本人英語学習者の関 係代名詞使用の分析： 構文解析データを用い た習熟度別 NPAH・ SOHH 仮説との関連	【4-6】 山城椋雅 日本人英語学習者の語 彙学習におけるカタカ ナ語知識の活用
10:10- 10:40	【1-7】 曹芳慧 TEI を用いた Hardy ウェ セックス小説の会話部 コーパス構築と可視化	【2-7】 友澤辰泰 日本人英語学習者によ る後置修飾の使用の分 析：分詞と関係節の選 択要因比較	【3-7】 高橋留美・小倉浩・前 田昌子・大野真機・須 田拓基・近藤雅人・吉 川裕介 歯学系専門語彙抽出手 法としてのトピックモ デルの有効性	【4-7】 畔元里沙子・内田諭 大規模言語モデルを用 いた日英差のあるコロ ケーションの抽出

●シンポジウム II : 10:45-12:15 (135 教室)

学習者コーパスの構築

モデレーター： 近藤悠介 (早稲田大学)

シンポジスト： 杉浦正利 (名古屋大学) 「中学生スピーキングコーパス」  
阿部真理子 (岡山大学) 「高校生スピーキングコーパス」  
神澤克徳 (京都工芸繊維大学) 「大学生の学習者コーパス」

<休憩 12:15-13:15>

●研究発表：13:15–14:20

	Session 1 (131 教室) 司会：土屋知洋	Session 2 (133 教室) 司会：三浦愛香	Session 3 (134 教室) 司会：石井達也	Session 4 (135 教室) 司会：畔元里沙子
13:15– 13:45	<b>【1-8】</b> 田畑圭介・山縣節子 The Movie Corpus における強調の do を用いた発語内行為：学習英和辞典への活用	<b>【2-8】</b> Keisuke Yoshimoto A Corpus-Based Analysis of Same-Sex Marriage Discourse in Japanese Newspapers	<b>【3-8】</b> 西垣知佳子・赤瀬川史朗・蛸嶋亮介 中高生向け英文法学習ツール hDDL の全面改修と実践事例	<b>【4-8】</b> 神原一帆・菅原裕輝 コーパス研究の論理と倫理: 学術的な目的のコーパス利用に着目して
13:50– 14:20	<b>【1-9】</b> 飯島真之 現代英語の態度マーカー：CORE コーパスを用いた 33 種のレジスター別比較に基づいて	<b>【2-9】</b> Laurence Newbery-Payton A Corpus-Based Study of Reference in L1 and L2 English Narratives	<b>【3-9】</b> 仁科恭徳・赤瀬川史朗 Parallel Link (パラレルリンク) Ver.2.0 の概要紹介—搭載コーパス、新機能、今後の方向性について—	<b>【4-9】</b> 杉山真央 大祖国戦争の記憶の形成と感情: プーチン戦勝記念日演説にみる人称代名詞

<休憩 14:20–14:30>

●基調講演：14:30–16:00 (135 教室)

Corpora, Constructions, and Complexity: Measuring Language Development with Corpus Data

Robert Nelson Jr.  
(Temple University Japan)

●閉会式：16:00-16:15 (135 教室)

# 要旨

## ■ワークショップ I (10月5日)

Automatic annotation of epistemic stance-taking features: An NLP approach  
Eguchi Masaki (Waseda University)

Natural language processing (NLP) technologies are becoming increasingly accessible to a wider audience. In this workshop, I will introduce the Engagement Analyzer, an NLP tool designed to automatically identify and annotate epistemic stance-taking in texts. Following an overview of recent developments in NLP, I will briefly discuss the tool's development (Eguchi & Kyle, 2023), focusing on corpus annotation, machine-learning experiments, and dissemination. The workshop will offer a hands-on activity, allowing participants to apply the Engagement Analyzer in both research and educational contexts.

## ■ワークショップ II (10月5日)

ドイツ語コーパスの教育利用について  
牛山さおり (立教大学)

本ワークショップでは、現代ドイツ語の学問的研究の拠点であるライプニッツ・ドイツ語研究所がインターネット上に公開しているコーパスデータバンク DGD の中から、話し言葉研究と教育コーパス FOLK を紹介する。このコーパスが出来た背景、ドイツにおける外国人のためのドイツ語教育の状況などについても触れる。非常にシステムティックに構築されたコーパスシステムであるが、表記などに用いられる主な言語がドイツ語であるため、ワークショップでは説明を丁寧に行い、実際にコーパスをいくつか選んで提示する。

## ■シンポジウム I (10月5日)

ジェンダーと英語教育

モデレーター： 佐竹由帆 (青山学院大学)

シンポジスト： 石川有香 (名古屋工業大学)「現代の英語教科書に見るジェンダー」  
江利川春雄 (和歌山大学名誉教授)「歴史的視点から見る英語教科書のジェンダー」  
佐竹由帆 (青山学院大学)「英語指導 (DDL) とジェンダー」

このシンポジウムでは、英語教育におけるジェンダー問題を多角的に取り上げ、教育現場におけるジェンダー教育の取り組みを検討する。

英語教科書に描かれる女性像は、学習者のジェンダー意識に影響を与える。そのため、教育の場においてどのような女性の表象がなされているかを分析することは、男女共同参画社会の実現に向けた重要な課題である。英語教科書における女性の役割や描かれ方が学習者の意識にどのように作用しているのか、現行の教材を通じて考察する必要がある。

一方、過去の英語教科書に反映されたジェンダー観は、当時の社会構造や文化的背景を反映していた。過去の教科書分析を通じて、ジェンダーに対する歴史的な意識やその変遷を明らかにすることは、現代の教育におけるジェンダー課題を再考する上で有益である。過去の教育資料から学ぶことで、現在の教育における課題を新たな視点から捉えることができる。

またデータ駆動型学習 (data-driven learning: DDL) の手法を活用したジェンダー関連語彙学習についても考えてみたい。コーパスを参照して真正な英語表現に多量に触れることで、学習者が自らジェンダーに関連する語彙や文化的理解を深めることが可能となる。単なる知識の習得に留まらず、学習者がジェンダーに対する認識をより深く、批判的に考察する力を、DDL が養成する可能性が考えられるだろう。

本シンポジウムではこれらの視点を通じて英語教育におけるジェンダーの問題を総合的に考察し、議論を深める予定である。ジェンダーに関わる英語教育の在り方を再確認し、実際の教育活動について模索する場となることを期待している。

## ■シンポジウム II (10月6日)

### 学習者コーパスの構築

モデレーター： 近藤悠介 (早稲田大学)  
シンポジスト： 杉浦正利 (名古屋大学) 「中学生スピーキングコーパス」  
阿部真理子 (岡山大学) 「高校生スピーキングコーパス」  
神澤克徳 (京都工芸繊維大学) 「大学生の学習者コーパス」

学習者言語の集積である学習者コーパスを用いた研究が始まり三十余年が経ち、数多くの学習者コーパスが構築され、近年では、教育、研究においてその参照データとして必須のものとなり、大規模言語モデルの有用性が示されてもなお大きな期待が寄せられている。第二言語習得において発達段階の解明を目的とした研究、また、言語テストにおいては項目の作成、評価基準の策定において、学習者コーパスはこれまでも重要な役割を果たしてきた。しかしながら、話し言葉を対象としたものは十分とは言えず、さらに、縦断的なものは数少ない。これらへのニーズは研究、教育において高く、拡充と発展が望まれている。特に外国語として言語を学ぶ環境において学習者の発話を収集することは困難であることから、日本国内において、話し言葉を対象とした学習者コーパスの構築は大きく進展してこなかった。

本シンポジウムでは、日本の中学校、高校、大学のそれぞれにおいて学習者コーパスを構築した3人の登壇者が、構築理念とともにそれぞれの英語学習者コーパスの構築過程、利点、今後の課題などを発表し、司会者、参加者を含め、今後の学習者コーパス研究について議論する。

## ■基調講演 (10月6日)

Corpora, Constructions, and Complexity: Measuring Language Development with Corpus Data  
Robert Nelson Jr. (Temple University Japan)

How does the language knowledge system change as it develops? Almost certainly, it becomes more complex. A corpus-based measure of language complexity would be a valuable dependent variable for language development research, allowing researchers to take a large data approach to the study of language development capable of revealing relationships between language growth and the maturation of other cognitive abilities. Indeed, a corpus-based measure of developmental complexity might establish benchmarks that could help identify and understand atypical language development and enable the comparison of developmental profiles from different social contexts and under different educational styles. Despite the substantial complexity literature produced in some subfields of linguistics, there is no pursuit of a measure of developmental complexity. This seems to be due to a discomfort with the level of coarse graining required to measure language complexity. That is, like proficiency and readability measures, any practical language complexity measure will be unable to count all the entities that constitute a linguistic theory of language structure and so appear atheoretic. Some hold that this prevents any corpus-based complexity measures from being sufficiently comprehensive (Miestamo, 2006) and theoretically meaningful (DeGraff, 2001). The studies summarized in this presentation show that the description of language in the Construction Grammar framework (Goldberg, 1995; Croft, 2001) shows three affordances that enable the definition of a corpus-based complexity measure that meets both these requirements. These affordances are (1) comprehensiveness (i.e., full representation of the language and extensibility to new forms), (2) enumerability (i.e., representing language as a set of countable elements), and (3) surface availability (i.e., no hidden derivations or abstract constraints). Together, it is argued (and shown) here that these affordances enable a measure that shows how complexity changes in both first and second language development while matching public and institutional expectations about how a complexity measure should function.

## ■研究発表 1-1 (新しい研究の報告)

日本人英語学習者による ENABLE 概念の表現形式  
福田航平 (東京外国語大学大学院生)

Force-dynamics に基づく使役概念分類の1つに ENABLE がある (Wolff & Song, 2003)。この概念を表すのに、英語ではしばしば不定詞付き対格構文 ([V NP to V]の形式) を使用する (e.g. The vitamin B complex allows/enables the body to make full use of the food.)。しかし日本人英語学習者は英語母語話者と比較すると、ENABLE 概念を表現するのに不定詞付き対格構文を使用しない傾向がある。本研究では、日本人英語学習者が ENABLE 概念を表すのにどのような形式を使用する傾向があるのかを、学習者コーパス ICNALE (Ishikawa, 2023) を用いて定量的に調査する。また、英語母語話者と中国人英語学習者との比較を行うことで、日本人英語学習者による ENABLE 概念の表現形式の特徴を明らかにし、その特徴に関連している要因についての考察を行う。

Ishikawa, S. (2023). The ICNALE guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English. Routledge.  
Wolff, P., & Song, G. (2003). Models of causation and the semantics of causal verbs. *Cognitive Psychology*, 47(3), 276-332.

■研究発表 1-2 (新しい研究の報告)

Potential of L1 and L2 Corpora to Identify Target Lexical Bundles for Argumentative Essay Writing

Ryo Sawaguchi (Kansai University, postgraduate student)

The purpose of this study was to identify target four-word lexical bundles (e.g., on the other hand, as a result of) for argumentative essay writing and rank them in order of teaching/learning priority for Japanese learners. Lexical bundles play crucial functional roles in academic writing, but their nature in argumentative writing had been unexplored. Since argumentative writing skills help undergraduate students prepare for their future use of academic English (e.g., writing papers/reports), the lexical bundles under this genre deserve more attention. This study first extracted 78 target bundles from L1 argumentative essay corpora (International Corpus Network of Asian Learners of English: ICNALE and Louvain Corpus of Native English Essays: LOCNESS). The study then classified the bundles according to their discourse functions and semantic transparency to estimate the learnability for Japanese learners in L2 compatible corpora with the ICNALE. The results showed that while learners were comfortable using stance bundles (e.g., it is necessary to), they had difficulty using the bundles with referential functions (e.g., on the part of) and semantic opaqueness (e.g., when it comes to), suggesting the need to prioritize these two categories among the 78 bundles.

■研究発表 1-3 (現在進めている研究の進捗報告など)

Lexical Hierarchies in L2 Vocabulary Development: A CEFR-Based Analysis

Kohei Takebayashi (Tokyo University of Foreign Studies, postgraduate student)

This study explores the use of A-level single-word nouns, as defined by the CEFR, as hypernyms (superordinate words) and their semantically related synonyms at higher levels (B and C levels) as hyponyms (subordinate words). For example, "food" is a hypernym of "nutrition" and "sustenance." Drawing on Crossley's (2013) exploration of L1 and L2 lexical hierarchies, the study argues that L2 learners' existing vocabulary can support hierarchical lexical networks in the L2 lexicon. Single-word nouns from CEFR-aligned wordlists were matched with synonyms from the Oxford Thesaurus of English to examine semantic correspondence between A-level items and those at B/C levels. By listing search words and their synonyms with assigned vocabulary levels, the study revealed the types and levels of nouns related to A-level nouns. Results show that 148 pre-A1 nouns link to 2,534 counterparts, making up 20% of relevant nouns. Nouns up to B1+ have 6,943 counterparts, accounting for 54% of relevant nouns. The study discusses basic-level categorisation (Taylor, 2008) and pedagogical strategies for using these nouns to enhance vocabulary depth, with implications for other parts of speech.

Crossley, S. A. (2013). Assessing automatic processing of hypernymic relations in first language speakers and advanced second language learners: A semantic priming approach. *The Mental Lexicon*, 8(1), 96-116.

Taylor, J. R. (2008). Prototypes in cognitive linguistics. In *Handbook of cognitive linguistics and second language acquisition* (pp. 49-75). Routledge.acquisition (pp. 49-75). Routledge.

■研究発表 1-4 (新しい研究の報告)

同一学習者の技能間における産出結果の違い —スピーキングとライティングの比較から—

前田裕司 (九州大学大学院生)

同一学習者によるスピーキングとライティングのアウトプットをコーパス化したものは限られており、比例して、それに関連する研究も、単一技能のデータから成るコーパスを元にした研究と比較して非常に少ない。そこで本研究では、同一学習者によるスピーキングとライティングで、使用語彙レベルや使用文法、その他の言語特徴にどのような差があるか比較するため、31名の日本の高校生から英語スピーキングとライティングのデータを収集し、ミニ学習者コーパスを構築した。抽出・分析した結果に対して、統計的な検定を実施したところ、使用語彙レベルが、ライティングよりもスピーキングの方が有意に低いなどの結果が明らかになった。

■研究発表 1-5 (現在進めている研究の進捗報告など)

Hurford の制約に基づく“A or B”/“B or A”の形式差 : COCA データと R/Stan によるロジスティック回帰分析  
立野寛太 (大阪大学)

本研究では、英語の“A or B”の形で Hurford(1974)が指摘した「A が B、B が A を含意してはならない」という制約の違反に着目する。Gazdar(1979), Chierchia et.al (2009)が指摘しているように、“some or all”のような形式では B が A を含んでいることが明らかである。Gazdar(1979)は or の B となる要素だけが A を含むことを指摘したが、Fox and Spector (2018)は“all or some”のような A が B を含意する形式が COCA にもあることを指摘している。ただ、この形式差が何に影響を受けているかを定量的に捉えた研究は少ない。本研究では COCA とベイズ統計モデリングのロジスティック回帰モデル (松浦(2016), 馬場(2019)) を用いて、この形式に影響を与える要素について R と Stan で量的分析を試みた。その結果、先行研究が取り上げた要素の中で、モーダルの影響が大きい可能性が明らかになった。

Chierchia, G. and Fox, D. and Spector, B. 2009. “Hurford’s Constraint and the Theory of Scalar Implicatures.” In P. Égré. And G. Magri (eds.) Presuppositions and implicatures: Proceedings of the MIT-paris workshop. Cambridge: MITWPL.

Fox, D. and Spector, B. 2018. “Economy and embedded exhaustification.” *Natural Language Semantics* 26:1-50

Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition and Logical Form*. New York: Academic Press.

Hurford, J. 1974. “Exclusive or Inclusive Disjunction.” *Foundations of Language* 11, 409 – 411

馬場真哉. 2019. 「ベイズ統計モデリングにおけるデータ分析入門」. 講談社.

松浦健太郎. 2016. 「Wonderful R 2 Stan と R でベイズ統計モデリング」. 共立出版.

■研究発表 1-6 (現在進めている研究の進捗報告など)

A Stylistic Approach to the Sherlock Holmes Series and its Pastiches  
Li Chenjie (Osaka University, postgraduate student)

This study examines the boundaries of stylistic imitation in literary pastiches, with a particular focus on *The House of Silk* by Anthony Horowitz, the first officially authorized sequel to Arthur Conan Doyle's Sherlock Holmes series. While the Conan Doyle Estate has endorsed new Sherlock Holmes novels, the question remains: how closely can these imitative works replicate the distinctive style of the originals?

Using stylistometric techniques such as cluster analysis and correspondence analysis, this research compares four original Sherlock Holmes novels with *The House of Silk* and *The Exploits of Sherlock Holmes*, co-authored by Adrian Conan Doyle and John Dickson Carr. The analysis investigates linguistic features including word frequency, function word usage, and syntactic structures to evaluate the degree of stylistic similarity.

The findings demonstrate that, despite Horowitz’s deliberate effort to mimic Conan Doyle's style, significant differences persist between the originals and the pastiches. This suggests that perfect stylistic imitation is not feasible; even the most faithful pastiches cannot fully capture the intricate nuances of Conan Doyle’s writing. However, this study also sheds light on the extent to which a pastiche can approach the style of the original, providing insights into the complexities and limitations inherent in literary imitation.

■研究発表 1-7 (新しい研究の報告)

TEI を用いた Hardy ウェセックス小説の会話部コーパス構築と可視化  
曹芳慧 (大阪大学大学院生)

ウェセックス小説 (Wessex Novels) とは、イギリス作家 Thomas Hardy がウェセックス地方を舞台に描いた小説群を指す。本研究では、TEI (Text Encoding Initiative) に準拠したマークアップとアノテーションをテキストに施し、14 冊のウェセックス小説の会話部コーパスを構築する。特に、対話の addresser と addressee を明示する TEI タグを埋め込むことで、会話部をチャット画面のように表示し、長い英語小説をより楽しく読めるようにする。さらに、TEI タグを活用して伝達節 (reporting clause) を選定し、Hardy が発話を描写する際に使用する動詞と副詞の選定に見られる文体的特徴、および伝達節を通じたキャラクターライゼーションの効果について分析する。最後に、分析の過程で得られたその他の発見についても報告する。

■研究発表 1-8 (新しい研究の報告)

The Movie Corpus における強調の do を用いた発語内行為 : 学習英和辞典への活用  
田畑圭介 (新潟県立大学)  
山縣節子 (京都外国語大学)

強勢を伴った機能語は音声的に特別な響きを持つが、その音調にはどのような種類の意図が込められるか、The Movie Corpus のデータをもとに考察を行う。本稿で問題にする意図については福田(2013:136)が述べる「コミュニケーション上の摩擦や衝突を避け、コミュニケーションをできるだけスムーズに展開しようとする意図」と同義となる。話者が機能語に強勢を置く意図は伝達内容の強調だけでなく、ほめ・賞賛、感謝等の発語行為的ポライトネスと解釈できる実例があることを示し、発語内行為に基づく強調の do の分類と、英和辞典への関連記述が英語学習者にとって有用となることを本発表の帰結として論じる。



#### ■研究発表 1-9（新しい研究の報告）

現代英語の態度マーカー：CORE コーパスを用いた 33 種のレジスター別比較に基づいて  
飯島真之（神戸大学大学院生）

L2 英語ライティングでは、内容への書き手の評価や態度の提示も必要となる。その指導モデルとして態度マーカー（agree, prefer, interesting, essential 等）（Hyland, 2005）があげられる。Mur Dueñas（2010）、Azar and Hashim（2019）などの先行研究は、分析対象を学術論文に限定しているが、幅広いテキストにおける態度マーカー使用についても考察の余地がある。そこで本研究は、33 種のレジスターを包含する CORE コーパスを用いて、詳細な頻度調査を実施した。その結果、態度マーカーは、アドバイス、レビュー等の書き手の存在感が高いレジスターで多用され、各種の態度マーカーは、内容の一般性、発信者・受信者志向などで整理可能であることが示唆された。これらは L2 教育にも応用可能なものといえる。

#### ■研究発表 2-1（新しい研究の報告）

小学校英語検定教科書中の基本動詞の分析とその出現傾向  
竹下綾音（九州大学大学院生）

本研究の目的は、小学校英語検定教科書に出現する基本動詞がどの程度多義的に使用されているかを明らかにすることである。平野（2001）は、中学校英語教科書中の基本動詞の意味を分類・分析した結果、多義的な基本動詞の意味は幅広く扱われており、最頻出の語義はコアセンスであることを報告している。一方、小学校英語教科書における多義性や規則性の指導や説明は、教員や出版社の判断に委ねられている（cf. 西垣他, 2022；田中, 2024）。小学校英語検定教科書コーパスを分析した結果、ほぼ全ての基本動詞の最頻出語義は第一義であり、see には動物や観光地などの名詞が続き、get は主に get up という句動詞として使われる等、動詞ごとに用法の偏りが見られた。平野洋造. (2001). 「中学校教科書における多義語の扱われ方: 基本動詞に焦点を当てて」. 『中国地区英語教育学会研究紀要』, 31, 11-20.

西垣知佳子・星野由子・物井尚子・安部朋世・橋本修. (2022). 「小学校における言語知識の学習—外国語と国語の検定教科書の調査—」. 『千葉大学教育学部研究紀要』, 70, 279-288.

田中佑樹. (2024). 「小学校外国語科における認知意味論の知見を応用した多義語指導の実践: 意味カテゴリーの気づきに焦点を当てて」. 『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』, 14, 49-58.

#### ■研究発表 2-2（新しい研究の報告）

英語資格・検定試験の CEFR レベル推定—CVLA を用いたリーディングとリスニングの難易度比較—  
川越涼太（九州大学大学院生）

これまでリーディング（R）とリスニング（L）の難易度について、個別では様々な研究が進められてきたが、両者の難易度を比較した研究は非常に少ない。また、大学入試において英語民間試験の導入が注目を浴びたことにより、ここ数年で英語資格・検定試験の重要性が一気に高まった。それらを踏まえ、本研究は、入力テキストの CEFR-J レベルを推定するアプリケーションである CVLA を使用し、英語資格・検定試験の R と L における特徴と差異を明らかにすることを目的として検証を行った。両者の難易度を比較した結果、ほぼすべての試験で R の方が CEFR-J レベルは高く、R は L の 1 or 2 つ上の CEFR-J レベルになる傾向が見られ、1 文の長さや動詞の数も R の方が多かった。

■研究発表 2-4 (新しい研究の報告)

日本人英語学習者の過度受動化の誤り—高校教科書からのインプットの影響に関連して—  
岡田美穂子 (金城学院大学)

英語学習者は\*The earthquake was happened のように自動詞の過度受動化の誤りを犯すことが指摘されている。その原因として Aissen (1999)や Jackendoff (2002)のように「有生主語＋能動態」を好むという主語の有生性と統語構造の関係は言語学的普遍性があるとされる一方、Okada (2022; in press)では高校教科書からのインプットの影響の可能性も議論した。本研究では20冊約14万語のデータと日本人大学生118名による態判断課題の結果の報告によりさらに詳細な考察を行う。

Aissen, J. (1999). Markedness and subject choice in Optimality Theory. *Natural Language & Linguistic Theory*, 17(4), 673–711. <https://doi.org/10.1023/A:1006335629372>

Jackendoff, R. (2002). *Foundations of language: Brain, meaning, grammar, evolution*. Oxford University Press. <http://dx.doi.org/10.1093/acprof:oso/9780198270126.001.0001>

Okada, M. (2022). Overpassivization errors in English made by Japanese high school students: A voice judgment task. *Journal of the Chubu English Language Education Society*, 51, 25–32. [https://doi.org/10.20713/celes.51.0\\_25](https://doi.org/10.20713/celes.51.0_25)

Okada, M. (in press). Overpassivization errors made by Japanese EFL learners: University students and high school students. *Treatises and Studies by the Faculty of Kinjo Gakuin University, Studies in Humanities*, 21(1).

■研究発表 2-5 (現在進めている研究の進捗報告など)

中学校における発見学習による学力の二極化解消の試み—データ駆動型学習(DDL)を帯活動に導入して—  
河瀬農 (千葉大学大学院生)

令和6年度の千葉県高校入試においても問題になったが、学力の二極化は現代の学校教育の課題である。それを解消するために、学力の二極化解消に効果があるコーパスを用いた発見学習(DDL)を中学校の授業に取り入れたいと考えている。しかし、この学習は時間がかかり他の活動ができないのが課題点である。そこで、この活動を帯活動(10分程度の短い活動)として行うことで、学習指導要領が求めている言語活動も十分に行いながら、生徒の英語使用における流暢性と正確性を同時に高めていけることを本研究で検証する。

■研究発表 2-6 (現在進めている研究の進捗報告など)

コーパスに基づく英語政治ニュース研究—英語母語圏と非母語圏の比較研究—  
Xiao Yuanyuan (大阪大学大学院生)

メディアはニュース報道を通じて、特定の視点や立場を強調することで、情報の受け手にバイアスを伝える。このプロセスにおいて、主観性が重要な役割を果たす。本研究は、英語を分析対象言語とし、コーパス言語学と批判的談話研究を組み合わせ、ニュース記事におけるバイアスの特定を目指す。具体的には、BERTopicを用いてニュースの見出しからトピックを選定する。次に、バイアスを検出するモデルで記事の言語的特徴を分析し、その特徴をCDSの視点で解析する。これにより、ニュース記事の言語的特徴とその背景にある社会的・政治的意味を深く理解することが期待される。

■研究発表 2-7 (現在進めている研究の進捗報告など)

日本人英語学習者による後置修飾の使用の分析：分詞と関係節の選択要因比較  
友澤辰泰 (東京外国語大学大学院生)

英語の後置修飾は、日本人英語学習者にとって難しい文法項目の1つである。特に、分詞の後置修飾はほぼ同じ内容を関係節で表現でき、選択基準は明確ではない(Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1983)。本研究では、英語母語話者と日本人英語学習者を比較し、分詞と関係節の使用頻度、文中の生起環境及び文脈に基づく選択要因を分析する。英語母語話者均衡コーパス(BNC)と学習者コーパス(EFCamDat)から対象の文法項目を含む文を抽出し、名詞と動詞の性質や格、態などの文法的要因とトピックなどの文脈的要因に焦点を当ててアノテーションを行った。本発表では、分析手法の紹介、規範としての英語母語話者の特徴及び日本人英語学習者の使用傾向を分析し、両者間の差違を比較する。

Celce-Murcia, M & Larsen-Freeman, D. (1983). *The Grammar Book An EDL/EFL Teacher's Course*. Heinle & Heinle Publishers.

■研究発表 2-8 (新しい研究の報告)

A Corpus-Based Analysis of Same-Sex Marriage Discourse in Japanese Newspapers

Keisuke Yoshimoto (Ryukoku University)

Although support for same-sex marriage has been growing in Japan, discussions for its legalisation are slow in the Diet. To contribute to a more meaningful discussion, this presentation explores how issues around same-sex marriage are represented in media discourse using corpus-based methods. It compares two corpora consisting of articles from two Japanese national newspapers, the Yomiuri Shimbun and the Asahi Shimbun. The data spans from 1 April 2015, when Tokyo's Shibuya Ward started certificating same-sex couples, to 15 March 2024, the day after the Sapporo High Court ruled about same-sex marriage. Keyword, collocation and concordance analysis were used to identify differences in representations and argumentation strategies, exploring how their opinions on same-sex marriage are explicitly and implicitly delivered. It was found out that the Yomiuri Shimbun depicts gay and lesbian people mostly as fictional characters or foreigners and objects to same-sex marriage in terms of child welfare. In contrast, the Asahi Shimbun introduces more authentic voices of gay and lesbian individuals in Japan and criticises traditional family values as an obstacle to the advancement of gay rights and women's rights alike.

■研究発表 2-9 (新しい研究の報告)

A Corpus-Based Study of Reference in L1 and L2 English Narratives

Laurence Newbery-Payton (Seijo University)

This study analyzes the use of referential forms by elementary and intermediate L1 Japanese learners of English and native speakers of English. Data under analysis is contained in the International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE). All groups show a preference for indefinite articles in the early stages of narratives, while definite articles and pronouns are preferred in the middle and final stages respectively. In contrast, learners tend to select more explicit referential forms than native speakers. This is apparent in learners' continued use of indefinite articles throughout narratives, as well as their underuse of pronouns when compared to native speakers. Furthermore, the similarities between the use of referential expressions by elementary and intermediate learners suggest the difficulty of acquiring appropriately explicit referential expressions in L2.

■研究発表 3-1 (新しい研究の報告)

工学分野論文における能動態と受動態に関する考察

瀬戸義隆 (大阪大学)

本研究では、工学分野の英語論文での能動態と受動態の使用状況を比較し、それぞれの構文に特徴的な意味・機能の検討を行う。具体的には Elsevier OA CC-BY Corpus における工学分野論文をコーパスとして使用し、CasualConc の文法検索機能を用いて能動態と受動態を抽出し、各構文に含まれる動詞と被動作主に相当する名詞の分布を調査した。その結果、各構文には特徴的な動詞と名詞の共起関係があることが明らかとなった。本発表では、能動態と受動態の特徴的な共起関係にもとづいて各構文の特徴的な機能を検討するとともに、英語教育への応用可能性を探る。

■研究発表 3-2 (新しい研究の報告)

基礎医学論文におけるハイフンを含む名詞句のパターン

石井達也 (高知大学)・河本健 (広島大学)

英語論文での名詞化は冗長な表現を避ける効果的な手段である(Halliday, 2014)。名詞化の一つであるハイフンを含む名詞句は関係詞の使用を避け情報を統合する機能がある(Biber et al., 1999)。本研究では基礎医学英語論文 300 編(約 150 万語)で高頻度なハイフンを含む名詞句の振舞いを明らかにする。CasualConc (Ver3)の collocation の機能を用いて“-”を検索し、ハイフン直後の上位 200 語を抽出した後に品詞分類を行なった。抽出語の品詞は-state 等の名詞 124 語(62%)、-induced 等の過去分詞 38 語(19%)、-specific 等の形容詞 25 語(12.5%)、-containing 等の現在分詞 7 語(3.5%)、その他 6 語(3%)であった。このように基礎医学英語論文で多用されるパターンが確認された。発表ではそれぞれの機能と英語教育への応用可能性についても言及する。

■研究発表 3-3 (現在進めている研究の進捗報告など)

NEJM の症例報告における頻出表現

伊澤宜仁 (埼玉医科大学)

高等教育機関における英語教育の目的の1つとして、特定目的の英語 (ESP) について習熟を図ることが挙げられる。医学英語教育においても、医学目的の英語 (EMP) の諸相を明らかにすることは重要と考えられ、実際に医学研究論文の構造の議論もされている。しかしながら、医学英語論文の中でも、臨床の症例報告 (case report) がどのような言語的特徴を持つかはあまり議論されていない。以上の背景を踏まえ、本発表は症例報告に焦点を絞り、医学雑誌の中で最重要とされる The New England Journal of Medicine (NEJM) を媒体として、症例報告に見られる頻出表現について考察する。

■研究発表 3-5 (現在進めている研究の進捗報告など)

日本人英語学習者の発話におけるフィルターの生起位置と習熟度の関係性

田中悠介 (福岡大学)・瀬戸口彩花 (京都大学大学院生)・近大志 (関西大学)・神澤克徳 (京都工芸繊維大学)

本研究では、The KIT Speaking Test Corpus を使用し、日本人英語学習者のフィルターの生起位置を「文頭」「節境界」「句境界」「句内部」に大別した。その結果、テストスコアが平均以上の学習者は平均以下の学習者と比べて、文頭でのフィルターの使用が少なく、句境界での使用が多いことがわかった。文頭は伝えたい内容や使用する語彙、構文など、さまざまなことを選択する必要がある位置であるため、母語話者でも最もフィルターが生じやすい位置である。比較的習熟度の高い学習者はこのような全体的な内容等の選択をスムーズに行う一方で、句レベルでの語彙等の選択はより慎重に行う傾向があるのだと考えられる。

■研究発表 3-6 (現在進めている研究の進捗報告など)

日本人英語学習者の関係代名詞使用の分析：構文解析データを用いた習熟度別 NPAH・SOHH 仮説との関連

田中美優 (東京外国語大学大学院生)・投野由紀夫 (東京外国語大学)

本研究は、日本人英語学習者の関係代名詞使用の特徴を明らかにすることを目的とする。学習者の書き言葉コーパスである JEFLL と ICNALE から CEFR の習熟度別にデータを収集し、構文解析プログラム Stanza で関係節を抽出後、習熟度別使用傾向、NPAH (関係詞化の容易性に関する統語的階層)、SOHH (主節と関係詞節の格の関係による難易度階層) との関連、および誤用傾向を調査した。結果として、使用頻度は NPAH と SOHH に概ね従うが、使用頻度と習熟度は一致しなかった。また誤用頻度は、ICNALE では U 字型の傾向を示し、JEFLL では習熟度の向上とともに減少した。これらの結果から得られた指導への示唆にも言及する。

引用文献

Hamilton, R. L. (1994). Is implicational generalization unidirectional and maximal? evidence from relativization instruction in a second language. *Language Learning*, 44(1), 123–157.

Keenan, E. L., & Comrie, B. (1977). Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8(1), 63–99.

■研究発表 3-7 (現在進めている研究の進捗報告など)

歯学系専門語彙抽出手法としてのトピックモデルの有効性

高橋留美 (昭和大学)・小倉浩 (昭和大学)・前田昌子 (昭和大学)・大野真機 (昭和大学)・

須田拓基 (昭和大学)・近藤雅人 (昭和大学)・吉川裕介 (京都外国語大学)

本発表では歯学分野の専門用語を効果的に整理・提示するため、トピックモデルを用いた英語学術論文からの語彙抽出手法の有効性を検証する。歯学系ジャーナルに掲載された過去3年間の論文を対象に、12のトピックを設定して当該モデルを適用する。各トピックから出現確率上位50語を抽出し、「う蝕の成因と予防」や「口腔衛生」など、歯学の専門分野に対応した意味的関連性の高い語群が得られることを実証する。この手法により、歯科特有の専門用語や最新の研究トレンドを反映した新語、基本的な重要語句も効率的に抽出できることを示す。本研究の成果は、歯学分野における効果的な語彙学習支援や最新の研究動向の把握に貢献できることを主張する。

■研究発表 3-8 (コーパス、ツール、手法などの紹介)

中高生向け英文法学習ツール hDDL の全面改修と実践事例

西垣知佳子 (千葉大学)・赤瀬川史朗 (Lago NLP)・蛸嶋亮介 (千葉県立茂原樟陽高等学校)

本発表では、発表者らが 2019 年から継続的に開発している中高生向けの英文法学習 DDL ツール (hDDL) の最新版の新機能と高校での活用事例を紹介する。4 度目の改修となる最新版ではインターフェースを全面改修した。具体的には、搭載している教育用コーパスの増補 (文法項目を 1 項目追加、用例数を 4,300 文から 5,500 文に拡大)、英文や日本語訳を隠した状態で、音声を聞いて、検索結果を探究する「音声モード」の導入、文の種類を指定した例文の表示 (例 現在進行形の疑問文だけを表示する) 等、教育現場からのフィードバックを最大限に反映した。また、2 つめのアウトプットツールとなる穴埋めクイズを追加し、学習成果を確認できるようにした。

■研究発表 3-9 (コーパス、ツール、手法などの紹介)

Parallel Link (パラレルリンク) Ver.2.0 の概要紹介—搭載コーパス、新機能、今後の方向性について—

仁科恭徳 (神戸学院大学)・赤瀬川史朗 (Lago NLP)

本発表では、2024 年 7 月末に一般公開された日英・英日パラレルコーパス検索ツール Parallel Link (パラレルリンク) の Ver.2.0 の概要を紹介する。この Ver.2.0 では、新たに 4 つのパラレルコーパスが追加され、新機能として「コンテキスト表示」、「コロケーションのコーパスごとの分布グラフ表示」、「Google 翻訳リンク機能による音声チェック」を追加している。一方で、Alignment の関係で翻訳が上手く表示できなかった TED コーパスについては、公開を一時停止していたが、修正を施した上で 9 月から再公開することとなった。本発表では、このような事情や今後の開発の方向性についても触れたい。

■研究発表 4-1 (現在進めている研究の進捗報告など)

否定接頭辞 un- 付加派生語の歴史的考察—Unkempt の事例を中心に—

岡田晃 (小山工業高等専門学校)

本発表は、否定接頭辞付加派生語に関する通時的研究の一環として行われているものである。英語の歴史を辿ると、かつては使用されていたが、何らかの要因で使われなくなった語が数多く存在することがわかる。今回の研究対象である unkempt もその一例であり、現代英語では使用頻度が非常に低いとされている。本発表では、現代英語における unkempt の使用頻度を BNC (British National Corpus) を用いて調査し、過去の事例については OED (Oxford English Dictionary Online) を参考にして通時的に分析を行う。言語はコミュニケーションの主要なツールであるが、語彙や語形成に関しては依然として未解明な部分が多い。本研究が、そのような未解決の問題に対する理解を深める一助となることを期待する。

■研究発表 4-2 (現在進めている研究の進捗報告など)

Than I/me を伴う比較構文における格のゆれ

久屋愛実 (立命館大学)

本研究は、than I/me を伴う比較構文 (He is taller than I/me 等) に現れる人称代名詞の、主格から目的格への変化について記述する。この人称代名詞が主語機能を有する場合、主格を用いるのが規範的とされるが、運用面ではしばしば目的格として現れる。2000 年代以降のデータからは「主格と目的格が半々」(Biber et al. 1999) の状況から目的格への変化がさらに進み、than が接続詞ではなく前置詞として認識される傾向がより一層強まっていることがうかがえる。この構文における変化の度合いは、It is I/me 構文 (言い切り型構文) (Kuya 2021) よりやや遅れつつも It is I/me who 構文 (久屋 2024) より進んでおり、また人称代名詞の種類によっても異なると見られる。

引用文献

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, F. (1999) *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Longman.

Kuya, A. (2021) A corpus-based variationist approach to the use of *it is I* and *it is me*: A real-time observation of a syntactic change nearing completion in COHA. *Gengo Kenkyu*, 159, 7–35.

久屋 (2024) 「It is I/me who 構文における relative attraction の効果を検証する：最近の動向」『社会言語科学会第 48 回大会発表論文集』 pp.95–98.

■研究発表 4-3 (新しい研究の報告)

HAVE the advantage が従える同格節 that—that 節中の助動詞 can は必須要素か—  
土屋知洋 (芝浦工業大学)

「強み[利点]をもつ」を表す HAVE the advantage が、同格を表す that 節を従えるという先行研究は皆無に等しい。一方、この用法を容認し、that 節内には“可能性”を表す can が必須とする英語母語話者がいる。本研究では、英米差や話し言葉・書き言葉といったレジスターを考慮したコーパスに基づく量的・質的検証から、これまでに明示されてこなかった[1]同格 that との共起が可能なのか、[2]advantage の説明要素に“可能”の意味が必要かどうか、という二点の実態を明らかにする。

■研究発表 4-4 (新しい研究の報告)

Just because 構文の変異理論的分析  
森下裕三 (桃山学院大学)

本発表では、Hilpert (2005) らによって研究が進められてきた JB-X DM-Y 構文として知られる (1a) 示すような構文と、(1b) に示すような構文との関係について COHA をもちいた通時的な分析を試みる。

(1a) Just because he is rich doesn't mean he is happy.

(1b) Just because he is rich that doesn't mean he is happy.

従来の研究では、(1a) に示すような構文は (1b) に示すような構文から that が脱落して生じたと考えられてきた (e.g. Hirose 1991)。しかし、通時的な研究によって、(1b) に示すような構文は (1a) に示すような構文に that を加えることによって生じたということを主張する。

参考文献

Hilpert, M. (2005). A diachronic perspective on concession constructions with just because. In A. Makkah, W. J. Sullivan, & A. R. Lonely (Eds.), *Lacy's Forum XXXI: Internconnections* (pp. 67-80). Houston: LACUS.

Hirose, Y. (1991). On a certain nominal use of because-clause: Just because because-clause can substitute for that-clause does not mean that this is always possible. *English Linguistics*, 8, 16-33.

■研究発表 4-5 (現在進めている研究の進捗報告など)

CEFR-J ライティングプロジェクト：さいたま市との協働による学習者コーパス分析  
中谷安男 (法政大学)

日本の学習者への共通指標として基礎レベル Pre-A1 から始まる CEFR-J が構築された。この中のライティング指導がいかに公立中学校に導入可能か、さいたま市の協力を得て検証した。今回は 2020 年 7 月から 2023 年 12 月にかけて CEFR-J 準拠の A1 レベルのテストタスクを教室で実施した結果を活用する。これをテキストデータとしてターゲットコーパスを作成した。また同市は通常の英語検定教科書と共に独自のグローバルスタディと教材を活用している。これらをテキストファイルに直し参照コーパスとした。この参照コーパスがターゲットコーパスに与える影響を調査し CEFR-J のライティング指標としての可能性を確認した。

■研究発表 4-6 (現在進めている研究の進捗報告など)

日本人英語学習者の語彙学習におけるカタカナ語知識の活用  
山城棕雅 (東京外国語大学大学院生)

英語母語話者が高頻度で使用する英単語 2,000 語の約 40% は既にカタカナ語として日本語へ借用されているため (Daulton, 1998)、カタカナ語の知識は日本人英語学習者が英単語を学習する際に役立つと考えられる。しかし、いくつかのカタカナ語は元の英単語とは異なる意味で使用されることがあるため、日本人英語学習者の語彙学習の妨げにもなり得る。本研究では、カタカナ語と英単語間の意味のずれが日本人英語学習者の語彙学習に与える影響について考察することを目的とする。英語教科書コーパスや英語教育で使用されている語彙リストを用いて、日本語のカタカナ語とは意味が異なる英単語を抽出し、その意味のずれを可視化・定量化する方法を模索する。

Daulton, F. E. (1998). Loanword cognates and the acquisition of English vocabulary. *The Language Teacher*, 20(1), 17-25.

■研究発表 4-7 (現在進めている研究の進捗報告など)

大規模言語モデルを用いた日英差のあるコロケーションの抽出  
畔元里沙子 (九州大学大学院生)・内田諭 (九州大学)

コロケーションのレベル推定は困難な課題の一つである。その主要な原因として、コロケーションを構成する各単語の L1 における単独の訳語の合成が、コロケーション全体としての訳と一致しない場合があることが挙げられる。本研究では、このようなコロケーションを自動的に抽出するため、大規模言語モデル(LLM)を活用する手法を提案する。CEFR-J wordlist に記載の単語を含むコロケーションを LLM から抽出し、その構成単語を分解して LLM により単語単独の訳語を生成した。この結果をコロケーション全体の訳と比較することで、日英差のあるコロケーションの抽出と日本人英語学習者向けの難易度レベルを付与する方法を提案する。

■研究発表 4-8 (現在進めている研究の進捗報告など)

コーパス研究の論理と倫理: 学術的な目的のコーパス利用に着目して  
榎原一帆 (情報通信研究機構, 立命館大学)・菅原裕輝 (大阪大学)

本発表の目的は学術的なコーパス利用に生じる倫理的な問題を整理し、より活発で生産的な研究を目指すための提案をおこなうことである。[2, pp.60–69]はコーパスの調査回答者、開発者、配布者、使用者に関し、それぞれの倫理的問題を論じている。近年では[1]が Web 上のデータを利用したコーパス研究に関する倫理的な配慮を論じている。しかし、これらの論考は「...する必要がある」という古典的な倫理観[3]にもとづくという点に課題が残る。本発表ではコーパスの学術利用に焦点を絞り、研究者が最低限遵守すべき点と、配慮することが望ましい点の双方を、コーパス研究における論理との関係からの素描することを試みる。

引用文献

- [1] Koene, A., Adolphs, S., Perez, E., Carter, C.J., Statache, R., O'Malley, C., Rodden, T., and McAuley, D., 2015. Ethics considerations for corpus linguistic studies using internet resources. In *Corpus Linguistics 2015*, pp. 204–206.  
[2] McEnery, T., and Hardie, A. 2012. *Corpus Linguistics: Method, Theory and Practice*. Cambridge: Cambridge University Press. (石川慎一郎 (訳) 2014. 『概説コーパス言語学: 手法・理論・実践』東京: ひつじ書房)  
[3] 菅原裕輝. 2024. 「ELSI/RRI」『入門・科学技術と社会』 pp.110–119. ナカニシヤ出版.

■研究発表 4-9 (現在進めている研究の進捗報告など)

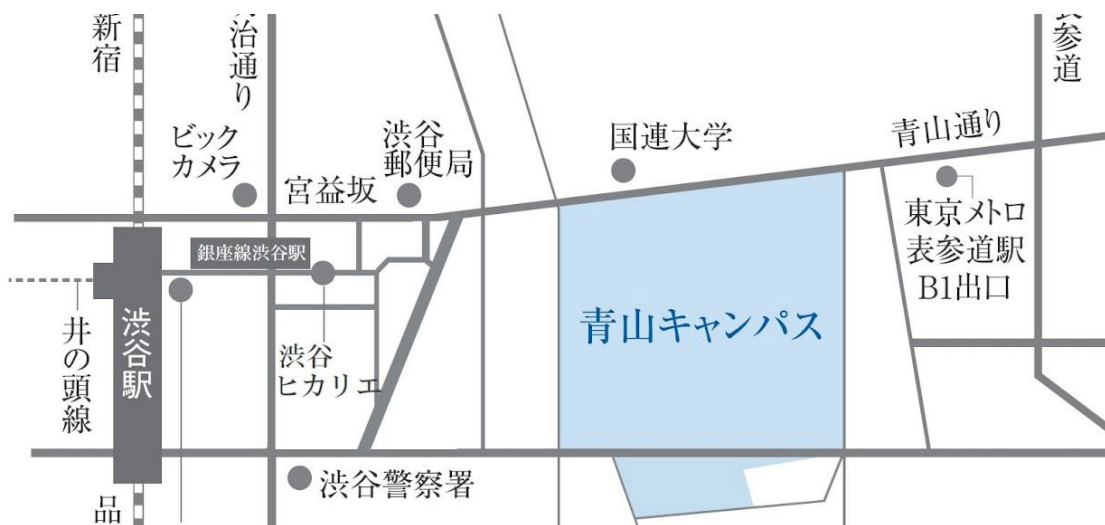
大祖国戦争の記憶の形成と感情: プーチン戦勝記念日演説にみる人称代名詞  
杉山真央 (名古屋外国語大学)

前回の学会発表では、プーチン大統領の戦勝記念日演説におけるテキストと年代の関係性を可視化し、レマタイズしたテキストでは 1-2 期に「歴史的視点、国内への意識」が、3-4 期に「国防的視点、国外への意識」が強調される一方、ノン・レマタイズでは「国家・祖国から個・記憶へ」という変化が任期ごとに見られた。この違いは、プーチンが国家戦略において、初期には国内の統一や歴史的記憶の再確認を強調し、後期には国防や国際的な影響力の強化へと焦点を移し変えたことを示している。また、**мы** (we) の使用においては、敬意、継承、義務という役割が強調され、これが国家の一体感や歴史的連続性を支える手段として機能していることが明らかになった。今回の発表では、これに加え、異なる人称代名詞の年代ごとの使用割合や相関関係、感情分析を行い、演説における修辭的戦略と感情の操作をさらに明らかにすることで、プーチンの言説がどのように国民意識に影響を与えているかを考察する。

《会場アクセス》

公共の交通機関をご利用ください。

JR 山手線・JR 埼京線・東急線・京王井の頭線・東京メトロ副都心線他「渋谷駅」より徒歩 10 分  
 東京メトロ（銀座線・千代田線・半蔵門線）「表参道駅」より徒歩 5 分



キャンパス内案内図



会場（1号館3階）案内図





《大会参加者へのご案内》

【大会参加費等】

- ・ 英語コーパス学会会員：無料
- ・ 非会員：当日会員参加費 2,000 円（2 日間の大会全プログラムに参加可能）
- ・ 大会（ワークショップを含む）への事前参加予約は不要です。ただし、懇親会（下記）への参加には予約が必要です。非会員の皆様も、懇親会にご参加いただけます。

【大会受付】

- ・ 大会受付は、第 1 日（10 月 5 日）は 8:30 から行います。第 2 日（10 月 6 日）は 8:45 から行います。受付場所はいずれも 1 号館 3 階 137 教室前です。

【展示・休憩】

- ・ 130 教室は休憩室としてご利用ください。茶菓のご用意がある他、賛助会員等による書籍等の展示・販売も行いますので、是非お立ち寄りください。

【無線 LAN 接続サービス】

- ・ 会場では、**eduroam** による無線 LAN 接続サービスが提供されています。（利用可能なのは、**eduroam** アカウントをお持ちの方に限ります。）その他の WiFi サービスの提供はございません。

【昼食】

- ・ 第 1 日（10 月 5 日）は 17 号館 1 階の学生食堂（10:30～15:00）と 1 号館 1 階のコンビニ（8:00～17:00）が利用できます。第 2 日（10 月 6 日）は 学生食堂・コンビニは営業しておりませんので、ご持参いただくか近隣の飲食店等をご利用ください。

【入会案内】

- ・ 大会当日に入会受付をしております（年会費：一般 5,000 円、学生 2,000 円）。入会されますと、当日会員参加費は不要になります。

【懇親会】

- ・ 10 月 5 日（土）のプログラム終了後、情報交換会（懇親会）を行います。なお、会場準備の都合上、懇親会は事前予約制となっております。参加ご希望の方は必ず事前予約をお願いします。

英語コーパス学会第 50 回大会情報交換会（懇親会）

日時：10 月 5 日（土）18:30-20:30

場所：アイビーホール 1 階宴会場

会費：一般 6,000 円、学生 4,500 円

- ※ 懇親会参加ご希望の方は、参加申込 Web フォーム（<https://forms.gle/P9ZDDJ2qitYjSvzn8>）から 9 月 22 日（日）までにお申し込み下さい。締め切り後の変更はできませんので予めご了承ください。

---

英語コーパス学会（Japan Association for English Corpus Studies）

会長 田畑智司

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学言語教育センター 小島ますみ研究室

e-mail: [jaecs.hq@gmail.com](mailto:jaecs.hq@gmail.com) 郵便振替口座:00930-3-195373

URL: <http://jaecs.com/>

---